大本（おほもと）

植田観樹
（現代宗教研究所研究員）

宗教への関心が高まっている昨今、人は既成教団よりも、新宗教に対してより大きな関心を寄せているようにみうけられる。これら新しい教団の信者増加の数はかなりのものである。ここに、新宗教に何か大きな魅力があるものと考えられるが、いま新宗教について知ることは、私どもにとって意義深いものと思う。そこで、まず新宗教の中でも比較的はやく成立し、不敬罪や治安維持法違反に問われて、前後二度にわたって弾圧（大本事件）を受けた「大本」について調査をこころみた。なお、大本教と通称しているが、法人名は「大本」であり（本部の門札は「おほもと」）、ここでも大本とする。

現宗研では、昭和六二年三月三一日、京都府亀岡市にある大本の本部（天恩郷）において、取材の機会を得ることができた。

調査に当たったスタッフ一同は、最初ご案内下さった教務局編集部の提氏から、この教団に関して私たちの質問に答えていただき、続いて昭和五八年一一月五日に亀岡本部万祥殿（礼拝殿）で行なわれた、世界の諸宗教による合同礼拝の様子をVTRで観た。そののち、修行の講師の豊田秀満氏にお会いし、大本の世界観、芸術観などを聴き、開祖出口なおの「お筆先」（神がかりの状態に入っての、いわゆる自動書記現象）の真筆、聖師出口王仁三郎（おにさぶろう）自作の楽焼などを

見学、さらに万祥殿等を拝観することができた。

大本については、様々な分野でこれまですでに研究されているところであり、それらにも言及すべきではあるが、そのすべてに触れることは膨大な紙数を必要とするもので、ここではこれらは参考文献として掲げることとして、いまは大本の現状を記して中間報告とし、問題の所在を探るにとどめたい。

※調　査　日　時　昭和六二年三月三一日

※場　　所　京都府亀岡市天恩郷（荒塚町内丸一）宗教法人「大本」本部にて

※調査スタッフ　赤堀正明主任、高橋謙祐所員、古河良晧・片野博義・植田観樹各研究員

一、沿　革

大本には、教祖が二人いる。開祖出口なお（天保七年〈一八三六〉一二月一六日～大正七年〈一九一八〉一一月六日）と、聖師出口王仁三郎（明治四年〈一八七一〉八月二二日～昭和二三年〈一九四八〉一月一九日）とである。

なおは、京都府福知山市に生まれ、綾部に嫁いだ。八人の子供を抱え未亡人となり、極度の貧困と家庭的不幸との戦いの中、明治二五年（一八九二）の節分の夜、突然神がかりになり、大声で神の声を発した。大声で叫ばぬように願うと、筆を持てとの命令があった。読み書きのできぬなおが筆を持つと、自然に手が動いて字が書けたと言う。これが「お筆先」である。以後没するまでの二七年間に、半紙十万枚に達するお筆先が書かれたという。最初の教えとされる「初発のお筆先」では、次のように、神の力による世の立替え立直しを宣言している。「……神が表に現れて、三千世界の立替え立直しを致すぞよ。……三千世界の大洗濯、大掃除を致して、天下太平に世を治めて、万古末代続く神国の世に致すぞよ……」（『大本神諭』より）

なおは、開教の当初は金光教のもとに布教を進め、近隣の人々に病気直しを通して教えを説いたが、六年目に独立

し、この時期に組織力に優れた王仁三郎を迎えて発展していく。

王仁三郎は、もと上田喜三郎といい、京都府亀岡市曽我部町穴太の貧しい農家に生まれた。明治三一年、高熊山で一週間修行して霊能力を体得し、布教に励んだ。翌年出口なおと出会い、これに協力して稲荷講社所属の金明霊学会をつくり、やがて、なおの末子すみ子（明治一六年〈一八八三〉～昭和二七年〈一九五二〉、『新宗教辞典』にはすみとするが、『大本案内』にはすみ子）の夫となって出口家に入った。大正三年、皇道大本と改称。同七年になおが八三才で没したが、この時には王仁三郎はすでに聖師として、なおの後継者たる地位にいた。

大本の当初からの主張は、世の立替え立直しであったが、これは大本の社会的影響力が大きくなるにつれて、反国家的勢力として、反発を買うことになる。大正九年八月、大阪の「大正日日新聞」を買収するに及び、当局も無視することができず、翌年二月一二日、幹部が不敬罪と新聞紙法違反の容疑で検挙された。これが第一次大本事件である。これは大正天皇の崩御による大赦で免訴となったが、昭和一〇年一二月、再度弾圧を加えられ、この時は神殿をはじめ施設も破壊され、大本の抹殺がはかられたという。

昭和二一年、大本は愛善苑の名で再建された。同二三年王仁三郎が没し、二代教主すみ子が後をつぎ、同二七年三月三一日すみ子がなくなり、四月一日「大本」と改称し、出口直日が三代教主となっている。

二、教　義

大本の教えの根本は、開祖出口なおが神がかって得たお筆先であり、これは神約を明示し世の法則を定めたものとされるが、世の立替え立直しによる、理想世界「みろくの世」の到来を説くものである。これを体系化したのが王仁三郎である。

「大本教旨」に、「神は万物不変の霊にして、人は天地経綸の主体なり。神人合一してここに無限の神徳を発揮す」

という。人の生死は神にあり、神と一体となることによって実践の力を得ることができる。さらに「霊主体従」といい、霊界が主、現界は従と説く。現世の欲にとらわれない生き方が神の心にかなうとする。これに加えて、次の「大本三大学則」が、大本の教義の要項といわれる。

一、天地の真象を観察して真神の体を思考すべし

二、万有の運化の毫差なきを視て真神の力を思考すべし

三、活物の心性を覚悟して真神の霊魂を思考すべし

さらに他の宗教との関係については、次のように説いている。そもそも「大本」とは、「世の大本」という意味で、「宇宙一切の大本」「道の大本」を意味する。宇宙の本源である真の神について明確な観念を持つことであり、真の神とその働きについて教わり、真の神を拝むところに大本の信仰がある（『大本案内』より）。したがって、一神即多神、多神即一神であるという。つまり、エホバと呼び、アラーと呼び、その時代その民族に応じて種々の神々が現れるが、すべて同一の神に集約できるという。その神こそ大本で崇める神であり、大本は他の神、他の教えに反するものではなく、統合するものであり、諸宗教は真の神の救いの意志が様々な形として現れたものとする。

教典

(イ)『大本神諭』　出口なおのお筆先を、王仁三郎が整序編集したものである。

(ロ)『霊界物語』　出口王仁三郎口述、全八三巻。

これらはいずれも、真の神が教祖二人に神がかりして、神の心、意志を伝えたものである。

神について

大本で言う真の神は、大本皇大御神（おおもとすめおおみかみ）と称す。この真の神が、人類を危難から救うために、特別に神がかりしたのが、開祖であり聖師である。開祖なおのお筆先を通じて神意を表わした神は、当初、金光教の影響を受け、艮の金神と呼

ばれていたが、のちこれはすなわち国常立尊（くにとこたちのみこと）のことだとされている。またこれに対して聖師王仁三郎についた神は坤の金神（豊斟渟尊（とよくむのみこと））とされ、開祖が男神、聖師が女神。この陰陽の二神をもって世界創造がなされたという。いずれも、真の神の意志の現れである。このように、なおは神意によって、霊は男性でありながら肉体は女性として現れたもので、これを変性男子（へんじょうなんし）といい、逆に王仁三郎を変性女子（へんじょう）という。

また、祭る御神体は教主の真筆である。

三、祭　神

大本皇大御神

四、組織・機構並びにその機能

法人の組織

大本の代表者は教主と呼ばれ、開祖出口なお以来、血統女子が継承し、現在はなおの孫に当たる直日が三代目教主となっている。また教主の夫、出口日出麿は教主補と呼ばれている。

これとは別に宗教法人として、三年任期で代表役員・本部長が定められ、以下、責任役員、総代がある。これらは、宗教活動というより法人の維持・運営の面での組織といえよう。

宗教活動面での組織

大本では、教祖と呼ばれる人は二人いる。先にも述べたがもう一度整理しておく。

A・開祖＝出口なお＝立替え立直しの神意を唱え開教した。

B・聖師＝出口王仁三郎＝なおの末子すみ子（二代目教主）と結婚。大本の教義・組織を整えた。

以後は血縁女子が教主となり、現在、教主の夫が教主補となっている。

大本では、教師は専門職ではなく、職業をそれぞれ別に持った信徒で、修行を積んだものが「宣伝使」（布教者）となって、無料奉仕の形で布教活動に当たっている。

※　宣伝使となるための条件乃至方法について、また宣伝使の義務あるいは職務については、具体的に聞いていない。

中央本部と地方組織

本部は、二箇所、亀岡市天恩郷（亀山城趾）と綾部市梅松苑にあり、大本の二大聖地とされており、亀岡は神教宣布、修行の場であり、綾部は祭祀の中心霊場で祭式の場とされている。さらに東京本部が、昭和四三年七月に開設されている（台東区池之端二―一―四四）。

また地方機関としては、教会、布教所がある。昭和六〇年版『宗教年鑑』によると、教会数七九二（内宗教法人四二）、布教所数三九三の、合計一、一八五となっている。

尚、蛇足ながら、同年鑑によると、信者数一七万四八〇人、教師数八、三二二人（男四、七五〇、女三、五七二）となっている。

※　因みに、日蓮宗は、寺院教会等五、二六四、教師七、七四三、信者二百二九万二、七〇一となっている。

五、未信徒の教化と信徒の教育法＝布教について

現在の大本は、芸術と諸宗合同礼拝に、もっとも力を注いでいるといえよう。開教以来、人類愛善と万教同根を説き、愛善と信真に根ざした宗教はすべて主神の経綸によって出現したものである、すべて宗教の根元は同じである、したがって宗教は互いの教えと祭儀を尊重しながら主神のみ心にそうよう努めねばならないと主張する。ここに各宗

教との親和協力を諮り、その実践として諸宗合同礼拝をすすめている。

なお、布教に関して堤氏の談によると、今の信者は四種に分類されるという。その一は、親から子への世襲的信者で、大本の信者の六乃至七割はこれである。二には、外部出版物等（講談社発行の『生きがいの確信』など）に感銘を受けて訪れる人も若干はある。三に、いわゆるお取次（神手代＝ミテシロによる祈り等）によって、病気の平癒などを得て信者となる人。四は、節分の人型（ヒトガタ）による、御祓いを通じての信者である。いずれにせよ、世に広く教えを説くことは必要なことであるが、現時点では広く一般に対しての布教は行なっておらず、それ自体が問題となっている。さらに、大本の教えをどう説き広めるかについても、お筆先や『霊界物語』に種々の警告等が出ているが、宣伝によって入って来る人が即、真に教えを求める人とはいえない現状では、これを外部に出してよいかどうかも検討しなければならない。また、布教の方法、方向に関しても、どうすればよいのかと思案しているのが現状であるとの事であった。

対社会的活動

(イ)文化・芸術関係　王仁三郎は、「芸術は宗教の母である」といい、偉大なる芸術家である造物主の心に触れるべく、自らも書・画・短歌・陶芸など芸術活動に積極的に取り組み、膨大な作品を残している。芸術は、修行の面でも大きなウエイトを占めており、茶の湯の心などが修行の課程に取り入れられている。昭和四七年一〇月から三年三カ月の間、欧米六カ国で芸術作品展を開催。この時、アメリカでキリスト教聖公会（エピスコパル派）との宗教提携が始まり、昭和五二年以後礼拝の交換が行なわれている。諸宗合同礼拝は、この交流が発展して実現したものである。

(ロ)諸宗教「合同礼拝式」　キリスト教聖公会との交流が発展して昭和五六年一一月、同五八年一一月に行なわれ、日本国内の諸宗教代表者や、ヒンドゥー教、シーク教、バジラヤン仏教、上座部仏教、ラマ教、イスラム教、ニューヨーク聖ヨハネ大聖堂長等が参加した。万教同根の精神に則っとった実践活動の一つである。

(ハ)エスペラント活動　万教同根、人類愛善の精神から、大本では人類共通の言語であるエスペラントの普及に努めている。はやくも大正一二年六月に大本エスペラント研究会（現在エスペラント普及会）が発会している。

(ニ)福祉活動　芸術とともに最も重点を置いている活動である。戦後本格的に取り組み、現在、亀岡保育所、老人ホーム松寿苑、精神病弱者更生施設みずのき寮、同指導施設かしのき寮、社会福祉法人「信光会」などがある。

(ホ)平和運動　開祖の世直し思想以来、平和の精神を持っており、いち早く平和運動を行なってきたが、運動そのものの政治的対立もあって、現在はさほど顕著な活動は行なっていない。平和の名の下、宗教の名の下のいさかいは避けよう、心の平和をまず作って世の平和ができるのだ、と教えている。

◎以上のような対社会的活動を大本の教えの下に行なっているが、これらの活動を通して、積極的に入信を勧めることはしていない。布教方法とは切離されたものと考えている（堤氏談）。

六、宗教体験の実際と意義づけ

(イ)修行　信者も未信者も誰でも、特に推薦もなくいつでも修行できる。これは亀岡本部の大道場で行なわれ、二種ある。

1、基本修行　朝夕の礼拝、講話を中心に聖地で生活する事に重点が置かれている。五日間。

2、第二修行　教えの実践を重視し、礼拝の仕方、芸術等を学ぶ。四日間。

(ロ)特別講座　正月、節分、五月、夏、秋と年五回ある。

(ハ)各地の夏期学級　小学三年から中学三年を対象に、高校から三〇歳までの信者が指導する。臨海学校的な研修。

(ニ)本部での各種研修会。

(ホ)青年祭、少年祭を隔年に行なう。

(ヘ)宗教体験について

1、上記の各修行、研修等を通して、教えが身につき、信徒としての自覚が促進される。

2、芸術を通しての宗教体験について、先述の「芸術は宗教の母なり」の言葉もあるが、大本の草創期には、お筆先(霊的世界)から組織化へと進み、文化芸術活動へと指向されていった。大本では神の世界に入るには、宗教、芸術、科学があり、宗教は遠大で、芸術は近く易しいとされ、重視されている。

3、「型の大本」　大本にあった事がそのまま鏡に写るように、世界に実現するという。たとえば第二次大本事件と第二次世界大戦を対照すると、事件の勃発が昭和一〇年一二月八日で大戦勃発が一六年一二月八日、大本の建造物破壊が一一年四月一八日で東京初空襲が一七年四月一八日、大審院で無罪判決を得たのが二〇年九月八日でサンフランシスコ講話条約調印が二六年九月八日。このように、大本の歴史において「型が出る」ことが立証される。したがって、大本がよいひな型を出せば「みろくの世」が出現するという。

4、お取次と諸祈願　これは各本部では毎日行なっている。お取次とは神に祈願を取り次ぐもので、基本的には信者がだれでも行えるものであるが、特に御手代を使うものは、宣伝使しか行えない。尚、たとえば病気とは魂の弱さからかかるもので、神の力を得て魂に力をつけ、汚れを取り除けば必ず治癒されるものであると説く。

5、霊能力に関して　大本は、出口なおという優れた霊能者のお筆先という霊的行為によって発展してきた。当初、霊能力は不可欠であった。しかし現在、霊能力は必要とされていない。本来の神が宿れば邪神のような奇抜な行動はとらず、常識人としてよりよく生きるものであり、これを理想とするのである。また、いわゆる憑依現象は、本人にとって好ましくないため、抑えるように指導している。特に聖地ではこれが極端に出るため、この傾向のある人は、聖地に入らぬよう指導している(堤氏談)。

尚、霊の実在は、現在でもこれを認め説いているが、現世利益中心の信仰はこれを否定している。

七、信徒の守るべき事項

「大本の三大学則」に加えて、信仰の実践要項として、「四大綱領」（天地の大道）と「四大主義」（処世の方針）を説き、これを生活の指針とするよう指導している。

八、管理運営法と財政について

この項目については、教団の近代的運営という観点から、ぜひとも調査したいところであるが、今回は取材の機会を得なかった。

九、入信して良かった点・悪かった点

これについても、直接信者に取材することができず、今後に期したい。

一〇、既成仏教との相違点、魅力

前項と、この項については、信者に直接取材すべきで、いまその機会を得ないため記すべきものがないが、私自身大本を取材しての印象を述べてみたい。

草創期における大本が、出口なおの霊能力を教義の根幹とし、布教の上での強力な武器として発展し、また王仁三郎らが弾圧の中に生き抜き大本の精神を貫いてきたという、いわばドラマティックな教団の姿を先入観念として持っていたためか、あえて俗世間的言い方を許されるならば、油抜きしたステーキのごとき物足りなさを感じたといわねばならない。もと亀山城趾に建設された大本の聖地は、はじめて足を踏みいれた私たちを快く迎え入れてくれた。門

から一歩入ったとたん、まさしく別天地が眼前に広がった感がした。草木の一つひとつまでもが、優しく私に語りかけてくれるような気さえし、喜びにあふれたあの情景がいまもって脳裏によみがえってくる。しかし、この聖地は、宗教活動の本拠地というよりも、この世の楽園を意識した人工造物の最たる感を私に持たしめ、かつてこの教団に対する私のイメージとはどこか異なったものであった。なおが、病気直しを通して布教していた時代を遥か過去のものとし、新たなる時代に入ってきたためであろうが、霊能力が必要でないとする言葉の陰に、宗教本来の泥臭さ、血生臭さとでもいうようなものを抑制し、さらには排除しようとする意志を感じてしまう。それ故にまた、布教の方針、方策を模索している大本の姿を実感した。

そしてこれは、ただ大本の抱える問題として看過することのできるものではなく、私たちの教団にとっても重大な問題と言えよう。すなわち教団のよって立つ根本はどこにあるのか。理念のみに走ることなく、開祖、宗祖の生きる姿の中に、その理想とする世界を見つめ直すことを忘れてはならないと思う。

さらに、これは単なる推測の域を出るものではないが、霊能力を否定するということの背景には、霊能者は分派に走る傾向があるということも、一因としてあるように思う。大本も、後に記すように多くの分派を生じており、これらは霊能を布教の武器としている他の教団についても同様と思われるが、これらについては今後の課題としたい。

一一、他宗教との関係

出口なおは当初、金光教の傘下に布教している。また出口王仁三郎は、静岡の稲荷講社の長沢雄楯（かつたて）から習合神道説とシャーマニズムの行法を習得し、後さらに京都の建勲神社主典、御岳教西部教庁主事等を遍歴している。

次に、大本から分派した教団を記す。（『新宗教の世界』より）

A、神道天行居　大正八年友清天行が創立。

B、心霊科学研究会　大正一〇年浅野和三郎。
C、菊花会　Bの流れをくんで小田秀人。
D、松緑神道大和山　教祖田沢清四郎（大和松風）は、大本を訪れ影響をうけた。
E、明道会　明治三年岸一太により独立、同九年惟神会と改称。
F、生長の家　谷口雅春（正治）は王仁三郎の『霊界物語』の筆録者の一人で、第一次事件後大本を離れ、昭和五年雑誌「生長の家」を出版している。
G、世界救世教　東京大森の分院長だった岡田茂吉は昭和九年大日本観音会を設立、戦後改称する。
H、三五教（あなないきょう）　昭和二四年中野与之助。
I、皇道治教神祇阴阳道（こうどうちきょうしんぎおんようどう）　昭和二二年世樹由太郎。
J、太陽会　深町霊場（もと、青年隊隊長）。
K、ひかり教会　昭和二二年設立。大本の機関誌等の編集をしていた岡本天明は入神状態になって自動書記現象が起こり、ゝ（日月地＝ひつぐ）神示が現れた。
L、ゝ（マコト）の家　川端善雄。ひかり教会の流れをくむ。

一二、大本に関する参考文献・資料

参考文献　『宗教カタログ』青山央編著、白馬出版。『新宗教辞典』松野純孝編、東京堂出版。『新宗教の世界』Ⅳ　出口栄二他著、大蔵出版。『新宗教研究調査ハンドブック』井上順孝他共著、雄山閣。
※　中でも『新宗教辞典』は教義・資料について詳しい。

資料　『大本案内』大本本部教務局神教宣伝部発行（大本の発祥から現代までの説明、教義の概略、略譜、修行日程、地方

機関、発行図書目録等を掲載)。『おほもと』(パンフレット)。『大本・日本伝統芸術学苑』。『大本海外作品展』。『平和と一致』。『生きがいの確信』出口日出麿著、講談社発行。

機関紙誌　(『新宗教辞典』参照)「愛善苑」月刊、一回に一万五千部。「大本ニュース」不定期、一万五千部。「おほもと」月刊、一万一千三百部。「木の花」月刊、一千五百部。「楽天書道」月刊、一千三百部。「まつごころ」月刊、二千百部。「International Oomoto」年二回、二千部、エスペラント。「Nova-Vojo」月刊、一千部。「少年部だより」年四回、六千部。

一三、今後の課題—結びにかえて—

大本の歴史と現状について一通り知ることができた。特に、教えの内容をどの様に説明しどう広めて行くか、あるいは分派の問題や霊能力等、現在の大本が抱えている問題は、本宗においても他山の石とすべき点も多く、今後もっと掘り下げて研究すべきことであろう。また、全国的なレベルでの信者に対するアフターケアは、機関紙や会誌の数多くきめ細かな発行をみるに、学ぶべきものを感ずる。ただ、教化する側だけではなく、教化される側、すなわち信徒の立場にたった調査の機会を得られなかったことが心残りである。大本と本宗との対比(相違点、比較対照してみるべき点等)と併せて、今後の課題として、とりあえず小稿を終えたい。